



1  
南海ちゃんの新しいお仕事 前篇

この、春。

あたし、高井南海たかい みなみは、大学卒業後、そのまま無事に就職することができましたっ！ しかも、名前を出したら誰でも知っているような大企業に。

（あたしの成績では、エントリーシート出そうだなんて思いもしなかった処ところだ。）それも、その会社の常務からヘッドハンティングされて。勿論もちろん、

正社員だあっ！

も、嬉うれしくって、涙出そう。

……と……思っていたのが、春、まだき。道歩いていると、ようやくと草花が萌もえ出る頃。冬が終わって、あっちこっちに緑が出始め、そして。

「あ、あの白い花、あっちこっちのお庭によくあるから、だから多分みんな雑草だと思っっているけど、実はハナニラなんだよね。ハナニラが咲く時期かあ」

って頃が過ぎ去り、入社式。

んでもって。

「お……ハルジオン。咲きだしましたかハルジオン。ヒメジヨオンはまだかなあ。どっかにあるかな、ヒメジヨオン」

なんて時期に、新入社員研修を受け。

「うおお、いつの間にこんなにかくなったんだ  
ドクダミ。この花はどこまで蔓延はびこるんだろう」

って頃、配属先が決まり。

「おお、来たか紫陽花あじさい。ここのは、全部ブルーなんだよね、こっちはみんなピンクかあ。でも、この紫陽花は色が安定していないのは何故なぜ? この土のペーハー、どうなってるんだろ」

「ありゃ? いつの間にか、ラズベリーの花、なくなっちゃいましたね、緑の実が結実してますね、そんな時期かい」

ってな頃になったら。

……嬉しくって、涙が出そうだったあたしの就職状況……何故か、大変微妙になっちゃったのだ。

うん、ここから……話を始めるのが、いいんじ

やないかと思うんだな。

☆

前のあたしの文章には、なんか、（特に就職を控えている方が読んだら）、もの凄く疑問を覚える処があつたんじゃない？

そうなんだ、何の特技もない（自慢じゃないけど、英検何級とか特殊な自動車免許とか簿記何級とか、そんな各種の資格、あたし一つも持ってないよ）あたしが、何故か先方からヘッドハンティングされて、有名企業に採用された。

これには、勿論、特殊な事情があるのである。

うん。実は、あたしもずっと知らなかったんだけれど、あたしは超能力者だったのだ。あ、ここでお願い、みなさま、引かないように。

「え、超能力って何？　時間を巻き戻すことができるのか？　相手が考えていることが全部判るとか？　予知ができちゃうとか？　ちっ、そんな能力がありゃ、どんな企業にでも就職できて当然で

しよ」って思ったあなた、それ、まったく話が違うから。(確かに。もし、そんな超能力があったら、そりゃあたし、どんな企業にも就職できそうだよねー。その前に、人生が、どえらく楽そうじゃない。でも、世の中にはそんなに甘い話はない。あたしの持っている超能力は、そんな都合がいいものではなかった。……それに。ふと思ったんだけど……そんな超能力が、もし、あたしにあつたのなら……そもそもあたし、あくせく就職活動する必要がないような気がするんだけど。いかなもんでしょうか。) あたしの持っている超能力っていうのは。

まず、前提。

ええと。これは事実だから、そう受け止めて聞いてね。

実は、世の中には、様々な処に、亀裂があるのだ。比喩ではなくて、現実として。

これ、(本当の状況は違うのかも知れないけれど)、世界のあっちこつちに、普通のひとには感知できない、空間の罅<sup>ひび</sup>があるような状況だって思

って、そんなに間違いないと思う。で、普通のひとは、この空間の亀裂を感知できない、でも、稀まれにそれにひっかかってしまうことがある。と、なると、どんなことが起きるか。亀裂にひっかかったひとは、こけそうになったり、たたらを踏んだり、してしまう。これは、これだけではたいしたことがないんだが……車運転しているひとが、この亀裂にひっかかってしまうと、稀に、交通事故が起きてしまう。ほら、時々あるじゃない、見晴らしもいいのに、段差だの高低差なんかもないのに、何故か交通事故が多発してしまう場所。そういう処には、間違いなく、亀裂があるのだ。そのせいで、車を運転しているひとも、歩いているひとも、何も悪いことしていないのに、全然不注意なんかじゃないのに、事故が起きてしまう。

もっと問題なのは、歩道橋の天辺だの、高い建物の屋上の柵の脇なんかには、亀裂がある場合だ。運悪くこの亀裂にひっかかってしまったひとは、そんなつもりなんかまったくなかつたのに、階段真っ逆様に落ちてしまったり、高い建物の屋上の

柵前でこけて下に落ちてしまったりする。

そして。あたしをヘッドハンティングしてくれた、うちの会社の常務、板橋<sup>いたばし</sup>さんというひとは、この亀裂を見ることができ、そんな超能力者だったのだ。彼には、この世界にある亀裂、薄いピンク色の靄<sup>もや</sup>のように見えるらしいのだ。

そして。

ここで、まったく違う話になるんだが。そんな世界の亀裂が「靄」として見える、板橋さんの一人娘が、鉄道事故で亡くなった。これには、亀裂、関係していないようだ。（というか、板橋さんがそう言っていないから、あたしはそう思っている。）

この時。多分、人間として壊れてしまった板橋さんは、この後、仕事をするでもなく、奥様とは別れ、ひたすら世界を彷徨<sup>さまよ</sup>った……らしい。うん、いろんな「亀裂」を確かめながら。亀裂さえなければ、世の中から不慮の事故は減る筈<sup>はず</sup>だっと思いつながら。（仕事をするでもなく彷徨<sup>さまよ</sup>った……って、こんなことができたのは、板橋さん、この企業の

創業者一族の直系の御曹司で、入社した時から幹部候補生、三十で部長になり、四十前に常務になったひとだから。実際、お嬢さんの事故が起きる前は、ばりばり有能な常務だったそう。けれど、お嬢さんの事故で壊れてしまい……事情が事情なんで、誰も強いことが言えず……今となつては、ほほ何もしていない、肩書だけの常務である。)そして、あっちこち彷徨つて、いろんな亀裂を見て回っていた板橋さんは、あたしに出会ったのだ。

自分でも意識していなかった、超能力者の、あたしに。

えと。

板橋さんにみいだされた、あたしの「超能力」は、も、絶対、ない方がいいっていう奴やつ。

あたしは、「亀裂」を認識することができない、でも、すべての「亀裂」に、絶対にひっかかってしまう、そんな超能力者だったのだ。

普通のひとは、そこに亀裂があったって、ひっかかることは、まず、ない。でも、あたしは。あ



たしだけは、そこに亀裂があったら、絶対にひっかかってしまう。こける、躓つまずく、つんのめる、もしそこが階段だったら階段から落ちる。そんでまあ、あたしがひっかかり、肝心の亀裂を物理的に引っ張ってしまうと、何故か、亀裂が、消える。

ほら、もう、あたしの超能力、羨ましくも何ともなくなつたでしょ？ そうなんだよ、板橋さんに会う前のあたしは、もうただ、ひたすら、「何かというところ、階段から落ちる、いろんなものにつかる」、そういう人生を歩んできた訳。

中学時代からのあたしの仇名あだな、粗忽そこっひめだよ。

親、友達、親戚みんなに、「南海ちゃんほんつとに粗忽だから」「あそこまで粗忽だともうどうしようもないねー」って言われてきた人生だった。(小学校の時は、粗忽そこっひめって言葉を知っているひとがあんまりいなかったから……仇名さえつかなかった。ただ、哀れみの目で見られていただけだった。)

まあ、でも、最初はね。あたしのことを、超能力者ちやうりきやうだっという、板橋さんのこと、あたしは信

頼できなくって、彼のことを「……電波のひと？」って思っ、警戒していたんだ。

でも、まあ、いろいろあって、彼が言っている『亀裂』、彼にピンクの靄に見えるものがあるって……やがて、あたしにも、判ってきて。

そうしたら。彼とあたしがタッグを組むのは、ある意味、当然でしょ？

世界の亀裂を見ることが出来る超能力者の板橋さん。その亀裂に、絶対ひっかかってしまう超能力者のあたし。んでもって、あたしがひっかかり、その結果、その亀裂を伸ばしてしまうと、亀裂は、消える。

ほんの少しでも、世界から亀裂を消したい板橋さん。

亀裂なんてものが世界にある限り、絶対それにひっかかってこけてしまうあたし。

双方の利害は、一致している。

二人で協力して、板橋さんが見た亀裂を、あたしが物理的に引っ張る。これで亀裂がなくなってくれば、二人共に、万事OK。

あ、いや、この前には、もう一個、説明があるか。

世界の亀裂に、必ずひっかかって、こけたり落ちたりぶつかったりするあたし。こんなあたしが、二十すぎまで、何の事故にもあわず、健康で無事に生きていることができたのは……実は、あたしには、もう一つ、超能力があったらしい、ん、だよね。

物理的に亀裂にひっかかるだけじゃなく、物理的に亀裂を利用する超能力。

早い話、あたしは昔っから、やたらと亀裂にひっかかって、やたらとこけ、そして、やたらと階段から落ちていた。でも、あたし、今までの人生で、骨折なんてしたことがない。

……まあその……一日一回は、必ず酷い勢いでこけたり、結構な頻度で階段から転げ落ちているのに……なのに、まったく骨折やたいした怪我をしない人間って……変、だよ、ね？

で、板橋さんと協力するようになって判ったの

だが。

実はあたし、亀裂にひっかかって怪我をした場合、その亀裂を利用して、自分の怪我を治すことができるのだ。（亀裂の中は、多分、あたしが今いるこの世界とは違う物理法則が支配しているんじゃないかと思う。）こけたり、階段から落ちたりして、あんまり痛い時、昔、おばあちゃんに教わった、「痛いの痛いの飛んでけー」って呪文を唱えさえすれば、そして、亀裂の中で、あたしが自分の怪我を撫なでてしまえば、それであたしの怪我、何故か治ってしまうのだ。そしてまた、これが、自分でも判らない話なんだけど、亀裂にひっかかっている間は、その空間を利用して、どうやら、自分の体以外のものも、〃治す〃ことができるらしい。（実際にあたしは、板橋さんのお嬢さんの遺品である、鉄道事故でずたずたになってしまったぬいぐるみを、〃治して〃しまった。）

そんで。あたしは、板橋さんにヘッドハンティングされ、うちの会社に就職することができた。

板橋さんは、あたしの為ために、修復課〃っていう新

しい部署を作ってくれ、あたしはそこに所属する初めての人間になったのだ。

（いや。世界から亀裂をみつけ、それを撲滅するのは、板橋さんとあたしが合意した、〃世界の為になる素晴らしいお仕事〃 なんだけれど……これ、営利団体である企業にしてみたら、何の意味もない部署だよ。というか、板橋さんとあたし以外は、あたし達が何やってんだか判らないと思う。だから、板橋さん、あたしのもう一つの特技、〃亀裂にひっかかっている時に、亀裂世界の中で、壊れたものを直すことができる〃 を前面に押し出して、こういう部署を作ってくれた訳。〃壊れたものを直します〃 っていう部署だ。……でも、落ち着いて考えてみると、うちの会社にこんな部署がある意味、よく判らないって言えば判らない……。）

でも……ただ……。

春は、よかった。

みんなが新人研修していて、あたしも新人研修していた時は。

ここであたし、ビジネスマナーとか、電話の受け方とか、いろいろ教えて貰<sup>もら</sup>って、すっごく勉強になった。

でも。紫陽花の葉が出だす頃になると。

新人さんのみんなは、おのおのの配属先に行き、あたしは、板橋常務が作ったばかりの、常務直属の課っていう、うちの会社初の形態の「修復課」って処に配属になり……ここの業務がなあ。

そもそも。人間的に、たったの三人。

まず、上司である板橋さん。直属の部下であるあたし。課としての格好をつける為か、板橋さんの秘書をずっとやってきたっていう、永岡<sup>ながおか</sup>さんっていうかなり年輩の女性がひとり。（基本、彼女は、会社側が板橋さんにつけた。お目付役<sup>めつけ</sup>なんじゃないかと思う……。）

んで、この三人が何やっているのかっていえば……。

最初の一カ月。

あたしと板橋さんは、ひたすらあっちこっちを歩きまわったのだ。

いや、これは、納得。

今まで、板橋さんがひとりで彷徨っていた時見つけた靄、つまりは「亀裂」、それに片っ端からあたし達は近づいてゆき、あたしはその亀裂を破壊する。その繰り返し。うん、これは、自分で言うのも何だけれど、「世界の為になる、とても素晴らしいお仕事を、今、あたしはしているのだ」って思えた。

また。あたしと板橋さんがそれをやっている間に、会社に残った永岡さんは、「みなさまの中に直したい「壊れてしまった」ものはありませんでしょうか？ それを募集しております」なんて告知を、会社の中で出しまくって。ただ、こんな告知を出したからって、すぐに「壊れたもの」がうちに集まる訳がなく、永岡さんは、社内メール、社員用のホームページ、うちの会社が出している社内報なんかはこの告知を書きまくり、対外的には「壊れてしまったあなたの大切な品、修復致し

ます」ってなホームページまで新設し……って、色々、やりまくってくれていたのだ。

でも。

紫陽花が咲きだす頃になっても。

修復を求められる物品はなかなか集まらず（と  
いうか、大切にしていたティ・カップが割れたか  
らって、それを会社に持ってくるひとつって、絶対  
ないよね。どう考えても、割れてしまったもの  
は直る訳がないんだから、諦めるのが普通だ。

——あたしは直せるんだけどね——。また、す  
でに部品がないから最早直すことができないぐと  
ても古い時計だのオルゴールなんかは、いくつか  
永岡さんの処に来ているらしいんだけど、これ  
については、板橋さんの方からストップが掛かっ  
ていて、あたしの処までやってきていない。これ  
らは、すすぐ直してしまうと、何故直せたのかが  
あきらかに疑問になってしまうので、とりあえず  
ペンディングぐっていう扱いになっているらしい。  
い。そして、それまで、あちこちを彷徨ってい  
た板橋さんが見つけた、大概の亀裂は、すでにあ



たしが消滅させてしまった。

と、こうなったら。

あたし達がやれることは、ひとつ。

しらみ潰しに、次の亀裂を探すのだ。

只今、ただいま課の入り口にあるホワイトボードに、永

岡さんが、詳細な地図を貼っている。とりあえず東京二十三区から始めようってことで、そこに貼られているのは、練馬区全図。地図的に見て、ここが東京二十三区の一歩左端だから。そんで、そんな練馬区の更に左端、西大泉の詳細な地図が、その隣にある。これがまた、家が一軒一軒記載してある、多分、町内会で配布しているような、どえらく詳細な奴で、私道も含め、すべての道が記載されている。

で、これのコピーを手にとって、板橋さんとあたしが何をしているのかって言えば……歩いているんだなあ、これが。この道を、全部。

まず、板橋さんが、歩く。それも、かなり、ゆっくりと。あたしにはよく判らないんだけど、亀裂って、陽の射し方によって見える感じが違う

らしくて、歩いている板橋さん、あっちを向いたりこっちを見たり。まあ、きよどきよど、どう考えても挙動不審なひとにしか思えない歩き方。

でもってあたしは、その二、三メートルくらい後を、ついてゆく。板橋さんが亀裂を発見しない限り、あたしには出番はない。とはいえ、あたしは、そこに亀裂があつた場合絶対にひつかかつてしまう」という超能力者だ、板橋さんの前をゆく訳にはいかない。

こうやって。一本一本、ひとつひとつ、すべての道を潰してゆく。一日の業務が終わると、会社へ戻って、本日潰した道をラインマーカーで塗うつぶす。これが、只今のあたしのお仕事。

まあ、でも。たまには、無事に亀裂を発見することができ、そんな時は、「いやっほうっ！」って感じで、板橋さんとハイタッチなんかもしちゃうんだが……この時だけは、「あたし達はとつてもよい仕事をしている、都民のみなさまが不慮の事故に遭う危険性が、これで、ひとつ、減った！」っていう自己満足に浸れちゃうんだが……

こんなの、多くて週に、二、三回。

と、なると。どんなことになるのか。

あたし達は、一体全体何をやっているのかって、会社そのものが、不審に思ってしまったても……しようがないってことだよね。（その前に。一週間、まったく亀裂が見つからなかった時は、自分自身が、「あたし何やってんの……」って思ってしまったことも、否めない。）

会社全体の、あたし達に対する目が、なんか不審なものを見るようなものになってしまったんだよね。

だから……あたしの、就職は……微妙。

こんな感じになったのが、ラズベリーの花が終わり、緑色の実が結実しだした頃。



あたしがこんなことを思ってしまったのは。

先日、同期会が、あったからだ。同じ年度にうちの会社に採用され、新人研修を一緒に受けた連

中のうち、本社配属になった十二人が集まる飲み会。

で、この会で、一番注目を浴びてしまったのが、あたしだ。(というか、あたしに対する注目があんまり凄くて、他のひとの話にはまったくならなかった。)

「高井さん……あの……板橋常務なんだけれどね」

乾杯が終わって、おのおのみんなが勝手にしゃべりだしたら。あたしの隣の席にいた、相模さがみさんってひとが、いきなりあたしに話を振ってきた。

それも、もの凄い、誤解まみれの。

「若年性認知症になってるって……ほんと?」

え。え、え、え、あの板橋さんが、若年性認知症? んな訳がないんだが、なら、何だってそんな誤解が発生する?

「そんなこと、絶対ないです。で……何だってそんな……」

「だって、高井さんは、常務と一緒に散歩をするのがお仕事なんですよ?」

瞬間。みんなの目が、あたしと相模さんに注目しているのが判る。

うぐつ。いや、確かにそれは、そうなんだが。あたし達がやっている「お仕事」は、他人が見たら、まさにそうとしか思えないものではあるのだが。

「常務が徘徊はいかいしているから、そのお目付役として、高井さんがいる。……そういう話じゃ、ないの？」

……いや、やっていることは、まさにそのとおりなんだが。しかも、板橋さんの歩き方が、亀裂すげを見る為に、眇すがめになったりあちちをみたり、直線的に歩くんじゃない、まさに、徘徊はいかいしている」としか思えない、ちよっとおかしなものだったから……確かに、知らないひとが見たら、そうとしか、思えないだろう。でも、あたし達がやっていることを、若年性認知症わかねせいにんちしやうの徘徊はいかいだって思われると……それは断固として違うんだが……だからって、それを「どう」説明したらいいのか、まったく判らない。

で、あたしが、二の句を継げずにいると。

「……それ……企業として、どうなの」

相模さん。あたしの代わりに、本当に怒っているみたいだった。

「新卒で正社員になって、まして本社勤務で、なのに、やってる仕事は、認知症の常務のお守り。

……確かに、常務が若年性認知症になっちゃったら、企業としてそれを隠すのは、ありだとは思いますが、それを隠す為に、新卒の社員ひとりを犠牲にするのは、あんまりだと思う。……だってこれ、あなたのキャリアにはまったくならないし、そもそも、そんなこと、家族で解決すべき問題だと思うの」

……いや……実際に、板橋さんのお散歩にあたしが付き合っているだけならば、徘徊している板橋さんをあたしがフォローしているんなら、この言葉は、全面的に正しいんだけど。けど、事実が違うことを、あたしは知っているから。

「いくら常務が創業者一族の御曹司だからってね、こんなことを、一新人社員に業務として強制するのは、どうかと思うのよ」

うわあ。相模さん、ほんつきであたしの為に怒ってくれているんだあ。

それが判ってしまったので……このあとの「飲み会」は、も、ぐたぐたになった。

相模さんは、あたしの代わりに怒ってくれている訳なんだけど、肝心のあたしは、実際の事実が判っている以上、怒る訳にはいかない。かと言って、この相模さんの怒りを無視することもできない。本当のことを説明もできない。だもんで、あたしが言葉を濁せば濁す程、相模さん、感情的にエスカレートしてきちゃって。

「高井さんの立場で、常務を糾弾できないのは判る。それは、一社員として言うてはいけない言葉なんでしょう。でも、企業としてのあり方として、これ、変！あまりにも変すぎっ！こんな仕事をずっと続けていたら、高井さんのキャリアが……」

うわあああ。相模さん、ありがとう。

ありがとう、ありがとう、でも、これ、この上もない程の、有難迷惑だあ。けど、そんなこと、

言えない。

で。

だから。

もう。

ぐちゃぐちゃ。

☆

「つー訳なんで」

飲み会の翌日。あたしは、練馬区の道を歩きながら、板橋常務に文句を言った。

「末端の社員の間では、あなた、若年性認知症だ  
ってことになってるんですよ？ それ、ほっとい  
ていいんですか？」

「いや、でも、ほっとくしかないだろ？ だって、  
本当のことなんか、言ったって誰も信じてくれな  
いだろうし、そもそも言っても意味がない」

いや、そりゃ、そうなんだろうが。

「高井さん。……僕が、自分の能力に目覚めて以  
降、それをまったく他人に言わないでいたって、



思ってる?」

え?

「それで、言ったとして……信じてくれるひとが……いた、と、思うかい?」

……こ。これは。この反応は。

ということは。言ったのか、板橋さん、亀裂のことを、他のひとに。で……。

で。あたし。ほそつと、言う。

「信じてくれたひとは……いなかっ……た……」

「だけならまだいいんだけどね。……僕は、今、心療内科や精神科のお医者様の名刺を、七つくらい持ってるよ。……とにかくあっちこっちでやらと貰ったもんで。いやあ、紹介されまくったよなあ、心療内科。精神科の予備診療を受けませんかって話も、もう、いくついただいたんだか」

「ああああ……」

そう、なるか。

ましてや。その頃の板橋さんと言えば、お嬢さんを事故で亡くして、奥さまと離婚したばかりで、みんな……あくまで、好意として、板橋さ

んに、そういうドクター、紹介しまくってくれたんだろなあ。

「病院への紹介状じゃなくて、ドクター個人の名刺だよ。これが、七枚。みなさん、あくまで好意として、僕のことを慮おもんばかってくれて、だから、紹介状じゃなくて、直接ドクターに会わせてくれて、それで、名刺」

「ああああ……。みなさん……。いい、ひと、なんですねえ……」

「ま、僕の状態が状態だったから。けどなあ。どんなに名刺戴いたいたってねえ……。受診しようって気には、なれないよなあ」

あ。

だからか。

板橋さんが、妙にあたしに好意的……。って表現が変かな、親密になっているのは、このせいかな。あたしが、板橋さんが言っていることを、完全に信じたから。(いや……。自分だって超能力者なんだ、信じない訳にはいかない。)

「僕は、自分のこと、心療内科も精神科も、受診

しなくていいと思っている」

「はあ。あたしも、そう、思います」

「だから、この名刺は無視するしかない。……んでは、他人様ひとさまのことはほつといて、とにかく仕事を続けようじゃないか」

と、いう訳で。今日もあたし達は、てくてく、てくてく、練馬の道を歩き続け……。で。

☆

「ストップ！ 高井さん、止まって」

いきなり板橋さんが言う。同時に、右手を出して、後に続いているあたしの行動を制限しようとする。

板橋さんがこういうことをするってことは、答は、ひとつ、だ。

「あったんですか、霽」

「あったどころじゃない」

久しぶりに。板橋さんの緊張している声。とい

うことは、板橋さんが見つけた「靄」は、かなり大きいか、かなり「深い」ものなのだ。（靄の色が濃くなれば濃くなる程、ピンクから赤くなる程、どす赤くなる程、その靄、事故を起こす確率が高くなる。で、色の濃い靄を、あたし達は、「深い」靄って呼んでいる。）

「じゃ、すぐにあたしが破壊します」

「できない」

え？

「あの靄、高井さんが破壊できない処にあるんだ……。あ、だから、高井さん、僕の脇に来て大丈夫だよ。ごめん、あなたを止めたのは、反射だった。靄が、あの位置にあるのなら、あなたを止める必要、なかったんだ」

「え？」

なんか、意味、判らなかつたけれど。とにかくあたしは、板橋さんの脇まで行ってみる。板橋さんは、路地の真ん中で止まっていて、彼の右手には、門扉があり、ポーチが続いており、当然、その先には家があり、玄関がある。

この家が、どういう構成になっているのか判らないんだけど、門扉から見ると限りでは、玄関ドアの隣には、大きな窓がある。その窓から見ると限りでは、そこにあるのは絨毯敷きのお部屋。ありゃ、あそこ、子供部屋なのかなあ、うん、日当たりは多分この家で一番いいんじゃないのかなあ、そこには、ベビーベッドみたいなのが見える。うん、ベビーベッドを、家の中で一番日当たりのいい処に置く、それは、なんか、とっても素敵なおことに思えて、あたしはちよつと、にこつとすると。

「高井さん……には、判らないか。あそこに、どす赤黒い靄が……ある」

どす赤黒い靄……これは、あたし達にとつて、ほぼ最悪の靄であり、これがあるって言うことは、ほぼ、最悪の亀裂があるってことだ。で、あたし息を呑むと、板橋さん、台詞せりふを続ける。

「その……ここから見える窓の内側に」

……つて？ え？

「ひとの家の窓の内側の靄まで、見えるとは、実

は思っていないなかったんだよなあ。けど、判っちまった。見えちゃった。……ま、そんだけ凄惨な亀裂だってことになるんだけれど……ちよつとどうしていいんだか……いや、でも、判っちまった以上、何とかしないと……」

あの。何の話をしていますか、今？

「霧はね、僕達がいれない場所にあるんだ。あの……窓の中。あの、絨毯敷きの部屋の中。その部屋の……ベビーベッドの直前」

え、いや、あの、ベビーベッドの直前に？

「あるんだよ、霧が。それも、どす赤黒い奴が」  
それ。

ほぼ最悪の霧ではないのか？ そんなものが、ベビーベッドの前にあるって……。

「これ、ひとり家の中の霧だから、僕達が破壊することはできない。ひとり家の中に、ずんずんはいつていつて、霧を破壊することは、できないんだ。でも……」

「でも」

判っている。これは、まずい。絶対に、まずい。

他の処ならともかく、ベビーベッド前にそんなもんがあつて、赤ちゃんを抱えたお母さんがそこでこけてしまったのなら。

誰がこけるのより。

赤ちゃんを抱いたお母さんがこけるのは、最悪に決まつている。

だって、ベビーベッドに寝るのは、本当の赤ちゃん。小さな子供なんかより、もつとずっとまづい。二歳児や三歳児なら、お母さんがこけても、子供が自分の前で手をついて、自分の頭や体を反射的に守ることが出来るだろう、けど、ベビーベッドに寝るような赤ちゃんなら。

「お母さんがこけたら、抱かれた赤ちゃんも間違ひなく一緒にこける。そのまま転がるつてこと……ない、ですか?」

こう言つてみたものの、答はもう、判つていた。そうなるに決まつている。

「そうしたら、頭を打つてしまふか、他の処を打つてしまふか……とにかく、反射的な回避行動がまつたくとれず、いろんな処をそのままぶつけて

しまう可能性が高い。ベビーベッドに寝る以上、まだ首が据わっていない可能性だってある」

「そ……それ、最悪じゃないですかっ！」

「最悪なんだよ」

……………どうしよう……………。

あたし、板橋さんと目と目を見交わす。でも、現時点では、どうしようもない。

一瞬あたし、このまま扉を乗り越えて、あの窓の前まで行って、窓をたたき割ろうかと思ったんだけど、視線で板橋さんが、そんなあたしのことを止める。

「高井さん、犯罪行為はしないように」

「なんてこと、言ってる場合じゃないでしょ！」

「そうなんだが、犯罪行為をする場合、せめて、意味のある犯罪行為をするように」

「……………って？」

「あなたがこのままずっと庭にはいつっていつても、あの窓、あなたの手じゃ、多分割れないよ？ ちょっと横から見てごらん。かなり厚いガラスなのが判るだろ？ あのガラスは、普通に手で殴っ



でも、割れない。それこそ、パールみたいなものでもない。……まあ、この程度の大きな家で、庭に面している大きな窓なんだ、そのくらいのこととは、普通の家でもやっているだろうね」

「ぐっ」

「その前に。この家、ちゃんと警備会社と契約している。シールがある。君が門扉乗り越えて庭にはいった瞬間に、警備会社に連絡が行くだろうし、万一、ガラスなんて割った日には、警備会社から人がとんでくる」

じゃ、駄目じゃん。じゃ、どうしたらいいの。

「このガラスを割る為には、ちょっと特殊な用意がいる。だから、それも含めて、一回、撤収、だ」

……一回撤収って……板橋さん、まさか、あなた、このガラス、割る気満々なのでは……？

ま、でも。

板橋さんが、このガラス、割る気満々なら、いっつかあ。あたしも、このガラス、割る気満々で、とにかくこのガラス割って、あたしには見えない、

でも板橋さんが言っている、その霽を何とかしたい気持ちで一杯なんだから……。

☆

撤回している最中に、一回、板橋さんは、どこかに電話を掛けていた。

そして、会社に帰ったら。

うちの課の入り口付近にある、ホワイトボードには、何故か、まったく新しい紙が貼りつけてあったのだ。

「常務から御連絡があった、問題の家なんですおかだが、岡田さんという方の家です」

え。

何でだ。

ホワイトボードの上には、「岡田邸」って紙が貼ってあって、そこには、あの家の間取り図が書いてあったのだ。

「岡田家の常駐人口は、只今四人。岡田輝安てるやす、岡田佐和子さわかこ、その長男の岡田輝紀てるき、その妻の岡田可か

憐<sup>れん</sup>。只今、岡田可憐は出産の為に産婦人科に入院中です。近日中に、岡田家には五人目の家族ができると思われます」

あの、何だってこんなことが判るの？

何だって、岡田さん家の情報がここにあるの？

……あの、電話か。

板橋さんが、どっかに掛けていた電話か。

あれで永岡さんが調べてくれたのなら……なら、こういうことって、ありなのかも知れないけれど……そしたら、永岡さんって、確かに板橋さんのお守りをしているひとかも知れないけれど、その意味が、まったく、違うじゃない。

永岡さん、認知症だと思われる板橋さんのお守りをしているんじゃない、板橋さんの為にいろんなこと調べている、特殊なひと？ えーと、あの、スパイとか、諜報部員<sup>ちやうほう</sup>とか、まさに、そういうことをしている、そーゆーひと？ しかも、この短時間でこういう結論を出せるんだ、永岡さんって、ほんっとおに有能な、そーゆーひと？

あたしが混乱している間にも、話は、さくさく

と、進んでしまう。

「岡田可憐が出産の為に入院中なら、ほら、高井さん、ちよつとは落ち着いていいよ。あのベビーベッドに赤ちゃんが来るまで、まだゆとりがあるみたいだから」

板橋さんがこう言ったので、あたしは少し、息を治める。息を治めて、で、あの。

「つまり。あのお部屋のベビーベッドは、まだ、当分、使われることがない、と」

「みたいだよねえ。肝心のお母さんが、まだ出産前で、入院しているんだから」

なら……ほおおっ。

☆

「と、こうなると」

あたしがやっと思を治める間にも、永岡さんと板橋さんは、会話を続けていたのだった。

「問題は、あの家に侵入する手段、ですよね」

これは、永岡さん。でも。

「家に侵入」。あの、有名企業の常務付きの秘書さんが、絶対に言っではいけない台詞ですよ、これ。

「窓を割る訳にはいかない。門扉を乗り越えるのも、問題外」

これは、板橋さん。窓を割る。門扉を乗り越える。あの、有名企業の常務さんが、絶対に言っではいけない台詞ですよ、これ。というか、端的に、犯罪です、これ。

「けれど」

ここで、板橋さんと永岡さん、二人の台詞が、被<sup>かぶ</sup>った。

「絶対に、可憐さんが、あの家に帰っではいけない。いや、帰ったっていいけど、あのベビーベッドに赤ちゃんを載せちゃいけない」

成程。あ、そっか。永岡さんも、板橋さんの特殊能力、判っているんだ。だから、こんな反応になる。

ま、それは、いいんだが……いや、よく、ないっ！

よく、ないっ！ 絶対、よく、ないっ！  
まずいっ！

だって、この言葉から導き出される結論っていつたら、多分、ひとつで……。

そして勿論、板橋さんと永岡さんは、その結論を導き出してしまったのだ。

あたしが……とにかく、あの家のひとと接触する、そして、合法的にあの家の中に招待される、そういうことに何とかしろっていう、あたし的に言えば、できる訳がない。答の、結論を。